



■ 解答一覧

(1) ウ (2) I : イ II : オ (3) ア (4) ア (5) ウ (6) (a) ア (6) (b) 少しだけ頭をゆるめ、からだで感じることで、わたしだけの「！」をアートの表現から見いだす (43 字)

■ 本文の要点

本文では、サイエンスとアートの違いと共通点が論じられている。

サイエンスでは、条件をそろえれば誰が実験しても同じ結果になることが求められる。研究者個人の「思う」「感じる」といった主観は排除され、ほかの人にも当てはまる一般的な論理を導くことが重視される。一方、アートでは、作者自身が何を感じ、どのように表現するかが重要である。そこでは、ほかの誰とも同じではない固有の「わたし」が求められる。

ただし、サイエンスとアートは完全に反対のものではない。どちらも、身のまわりの出来事や自然に目を向け、心を動かされて「！」と感ずることから始まる。その後の進み方が異なる。

【サイエンス】

- ・「！」を「？」へ変える（問いを立てて答えを追究する）
- ・一般化できる論理を求める
- ・一つの正解を目指す

【アート】

- ・「！」を表現する（感じたことを作品に表す）
- ・固有の「わたし」の表現を求める
- ・一つだけの正解はない

したがって、本文の中心は次のように整理できる。「サイエンスとアートは方法や目的が異なるが、身のまわりの物事に注目し、心を動かされることを出発点とする点では共通している。」

■ 各設問の解説

(1) 傍線部 A「外れ値」

- ・設問要求：本文中の「外れ値」について、ここでの説明として最も適切なものを一つ選ぶ。
- ・正答：ウ「一般的な結論を導けないようなデータ」

【根拠と論理整理】

本文では、サイエンスの実験について、条件をそろえれば毎回同じ結果になることが求められると説明している。データは平均化され、一回限りの出来事や偶然性の強いものは「外れ値」として扱われる。サイエンスが目指すのは、特定の一人や一回だけに当てはまる結果ではなく、ほかの場合にも当てはまる一般的な結論である。そのため、ほかのデータから大きく外れ、一般化の根拠にしにくいデータが「外れ値」とされる。「外れ値」は、必ずしも誤ったデータや無価値なデータという意味ではなく、一般的な結論を導く際には使いにくいデータということである。

【選択肢の検討】

ア：本文では、外れ値を特に注意して研究すべきだとは述べていない。サイエンスでは、一般化できないものとして排除されることが多いと説明している。

イ：外れ値は、でたらめな測定結果とは限らない。一回限りの偶然的な出来事であっても、実際に発生したデータである可能性がある。

ウ：サイエンスの一般化になじまないという本文の説明と一致する。(正答)

エ：「正解に至らない」のではなく、ほかの場合にも当てはまる一般的な結論の根拠にしにくいのである。

(2) 空欄Ⅰ・Ⅱ

・設問要求：傍線部B「わたし」の存在について説明した文を完成させるため、空欄Ⅰ・Ⅱに入る言葉をそれぞれ一つ選ぶ。

・正答：Ⅰ＝イ「一般化することができる」 / Ⅱ＝オ「ほかのだれとも同じではない」

【根拠と論理整理（空欄Ⅰ）】

本文では、サイエンスについて、「だれが考えてもその解釈できる無理のない論理」を求め、「わたし」がいなければ始まらないアートとは異なると説明している。サイエンスでは、研究者個人の感じ方によって結論が変わってはいけなく、誰が実験しても同じように確認でき、ほかの場合にも当てはめられる論理が重視される。したがって、Ⅰには「一般化することができる」が入る。

【根拠と論理整理（空欄Ⅱ）】

本文では、アートについて、「むしろ『わたし』がなければ始まらない」と述べている。また、「わたし」の「思う」や「感じる」を切り出して表現するのがアートであると説明している。アートでは、誰にでも共通する平均的な感情ではなく、作者本人だけが感じたことや、その人だけの表現が重要である。したがって、Ⅱには「ほかのだれとも同じではない」が入る。

【選択肢の検討】

ア：サイエンスが矛盾のない論理を求めることとは関係するが、「平均化された論理」という表現は本文の中心ではない。また、「平均化されたわたし」はアートの説明と反対である。

イ：サイエンスの論理の説明として適切である。(Ⅰの正答)

ウ：本文に「無理のない論理」という記述はあるが、選択肢の形では空欄の前後と適切につながらない。

エ：本文全体では、サイエンスとアートが完全な対極ではないと述べている。しかし、ここで問われているのは「論理」や「わたし」の性質である。

オ：作者固有の「わたし」が求められるアートの説明として適切である。(Ⅱの正答)

(3) 傍線部 C「共通するもの」

- ・ 設問要求：サイエンスとアートに共通するものの説明として、最も適当なものを一つ選ぶ。
- ・ 正答：ア「身のまわりの情景や出来事に目を向けることで、自らの感情の高まりを感じるところ。」

【根拠と論理整理】

傍線部の後では、内藤礼の作品や木漏れ日の研究が具体例として挙げられている。内藤礼は、木漏れ日の光がカーテンに映る日常の一場面を「いいなあ」と感じ、アートとして表現しようとした。一方、研究者は木漏れ日に興味を持ち、その仕組みをサイエンスの問いとして追究した。さらに本文では、「どちらも核となるのは、身のまわりの出来事や現象に目を向けて『!』と感ずるところ」と説明している。アートは、その「!」を作品として表現し、サイエンスは、その「!」を「?」へ変え、答えを追究する。しかし、どちらも最初は、身近なものへ目を向け、心を動かされることから始まる。この出発点が「共通するもの」である。

【選択肢の検討】

- ア：身のまわりの出来事に目を向け、「!」と感ずるという両者の共通点を表している。(正答)
- イ：小さな疑問を解決しようとするのは、主にサイエンスの進み方である。アートは必ずしも疑問の解決を目指さない。
- ウ：本文では、感動を自己の成長へ結び付けることは述べられていない。
- エ：新たな発見へつなげることはサイエンスには当てはまりやすいが、アートの目的を十分に表していない。両者に共通するのは、発見の前にある「!」という感動である。

(4) 空欄 D

- ・ 設問要求：空欄 D に入る言葉として、最も適当なものを一つ選ぶ。
- ・ 正答：ア「いいなあ」

【根拠と論理整理】

本文では、内藤礼の作品について、木漏れ日から差す光がカーテンに映し出されるような、日常生活の一場面や自然の美しさを表現していると説明している。その直後に、「そんなふだんの生活のなかの一場面や自然の美しさを、D、と感じている。」と続く。ここで表されているのは、理論的な判断や正誤の判定ではない。身近な光景を見て、理由を詳しく分析する前に生じる、素直な感動である。そのため、「いいなあ」が最も自然に入る。

【選択肢の検討】

- ア：身近な美しさに心を動かされたときの「!」に当たり、文脈に合う。(正答)
- イ：木漏れ日は、特別に珍しい現象として扱われていない。日常の中にある美しさとして取り上げられている。
- ウ：アートで問題となっているのは、正誤ではなく、個人の感じ方である。
- エ：実用性を考えている場面ではない。まず美しさに心を動かされた場面である。

(5) 傍線部 E

・設問要求：「広く学問の分野によって問いの立て方が違うことを知った方がいい」と筆者が述べる理由として、最も適当なものを一つ選ぶ。 ・正答：ウ「どこに注目して問いを立てるかによって、研究の内容が異なることを理解でき、自己の興味や関心に照らして学ぶべき学問の分野を考えられるから。」

【根拠と論理整理】

本文では、木漏れ日を例として、学問分野によって問いの立て方が違うことを示している。(物理学、植物学、認知科学、言語学や比較文化学、医学など)。同じ木漏れ日を対象にしても、何に注目し、どのような問いを立てるかによって、研究内容や学問分野が変わる。その違いを知ること、自分が何に興味を持ち、何を知りたいのかを考え、自分に合う学問分野を選びやすくなる。

【選択肢の検討】

ア：個人の感動が応用研究や将来の社会へ大きな影響を与えるとまで本文は述べていない。結論を広げすぎている。

イ：サイエンスの発展可能性や将来の展望だけに限定している。本文では、理系・文系を含む広い学問分野について述べている。

ウ：問いの立て方によって研究内容が変わることを理解し、自分の関心に合う分野を考えられるという本文の趣旨と一致する。(正答)

エ：個人の解釈が普遍的な考えとして定着するかどうかを問題にしているのではない。問われているのは、学問分野ごとの着眼点と問いの違いである。

(6) 文章のまとめ

(a) 空欄 I

・設問要求：本文から読み取れる筆者の主張をまとめた文の空欄 I に入る言葉として、最も適当なものを一つ選ぶ。

・正答：ア「たった一つの正解」

【根拠と論理整理】

本文では、サイエンスについて、一つの正解を求めるものと説明している。一方、アートでは、作者や鑑賞者によって感じ方や解釈が異なり、一つだけの正解があるわけではない。アートでは、作者が何を感じたか、どのように表現したか、鑑賞者が何を見いだしたかが一人一人異なる。したがって、作品に対する感じ方を一つの正解へ限定する必要はない。

【選択肢の検討】

ア：アートに唯一の正解はないという本文の主張と一致する。(正答)

イ：応用は、学問分野の例で述べられた内容であり、アートに向き合う際の中心的な主張ではない。

ウ：アートが偶然性を受け入れる場合はあるが、本文のまとめとして中心となる語ではない。

エ：アートを鑑賞する際の正解の有無とは関係がない。

(b) 空欄Ⅱ（記述問題）

・設問要求：筆者の別の文章を参考にしながら、空欄Ⅱに入る内容を、「！」「わたし」「表現」の三つの言葉をすべて用いて、40字以上50字以内で書く。・正答例：少しだけ頭をゆるめ、からだで感じることで、わたしだけの「！」をアートの表現から見いだす（43字）

【根拠と論理整理】

参考文章では、「！」を感じるためには、「少しだけ頭をゆるめておく必要がある」と述べている。また、「頭よりからだを通して感じるようにする」ことで、「！」に出会えると説明している。アートには一つだけの正解がないため、知識だけで作品を決めつける必要はない。頭を少しゆるめ、からだ全体で作品を受け止めることで、鑑賞者は自分なりの感動や発見を作品の表現の中に見いだすことができる。

【解法手順】

1. 指定された三語（「！」「わたし」「表現」）を必ず答案へ入れる。
2. 参考文章から、「頭をゆるめる」「からだで感じる」を抽出する。
3. 本文の「アートにはたった一つの正解がない」と結び付ける。
4. 「わたしだけの『！』を表現の中に見いだす」とまとめる。
5. 後ろの「ことができる」へ文法的につながる形にする。
6. 40字以上50字以内であることを確認する。

■ 初見問題で再現するための読解手順

1. 対比される二つの概念を表にする 本問では、サイエンスとアートが対比されている。ただし、「違い」だけを見るのではなく、途中で示される「共通点」にも注目する必要がある。

- ・違い：サイエンス＝一般化・正解の追究 / アート＝固有の「わたし」の表現
- ・共通点：身近な出来事に目を向け、「！」と感ずること 対比表を作ることで、空欄補充や内容説明問題を処理しやすくなる。

2. 具体例の役割を考える

木漏れ日の例は、単に美しい自然を紹介するためのものではない。同じ木漏れ日でも、アーティスト、物理学者、植物学者、言語学者などで着眼点や問いが異なるという違いを示している。具体例を読んだら、必ず「この例は、筆者のどの主張を説明するために置かれているか」を考えることが重要である。

3. 共通点と相違点を混同しない

問（3）では、アートとサイエンスの「共通点」が問われている。疑問を解決することや新しい発見をすることは、主にサイエンス側の特徴である。両者に共通するのは、その前段階にある「身近な物事に目を向け、心を動かされること」である。設問が「違い」を聞いているのか、「共通点」を聞いているのかを最初に確認する必要がある。

4. 記述問題は必要要素を先に分解する

(6) (b) のような記述問題では、いきなり文章を書き始めず、次のように要素を分ける。

- ・方法：頭を少しゆめ、からだで感じる
- ・主体：わたし ・発見するもの：「！」
- ・場所：アートの表現の中 その後、指定字数に合わせて一文に結合する。

【コラム】お化け屋敷が楽しいのはなぜ？～全国の入試で狙われる「心の科学」～

みなさんは、お化け屋敷やホラー映画、絶叫マシンなどは好きですか？

自然界の動物は、身の危険を感じたら全力で逃げたり戦ったりします。わざわざ自分から「怖い思い」をしに行く動物はいません。しかし人間だけは、安全だとわかっているお化け屋敷でお金を払い、「キャーキャー」と悲鳴を上げて楽しめます。不思議だと思いませんか？

千葉県公立高校入試の国語で出題された研究者、齋藤亜矢さんの文章は、まさにこうした「人間の不思議な心」を科学的に解き明かしてくれます。

実は齋藤さんの文章は、千葉県だけでなく、東京都、静岡県、北海道の公立入試、さらには全国トップレベルの灘高校の入試問題などでも出題されています。

たとえば静岡県や雲雀丘学園高で出題された文章では、「怖い」と「美しい」という感情の意外な関係性がテーマになりました。人間は、理性で「ここは安全だ」とわかっている状態で恐怖を感じると、脳内にエンドルフィンという快感をもたらす物質が分泌され、それが癖になるのだそうです。また、灘高で出題された文章では、人間が「自分にとって必要な情報だけを選んで見ている」という脳の仕組み（映像に集中していると、画面の真ん中をゴリラが通り過ぎてもまったく気づかない現象）が論じられました。

「国語の論説文・評論文」と聞くと、難しくてつまらない文章ばかりだと思いませんか？しかし実際は、今回のアートとサイエンスの話や、お化け屋敷の話のように、「人間ってなんでこんな風に感じたり、行動したりするんだろう？」という身近な謎解きがたくさん詰まっています。齋藤さんのような「文系（芸術や感情）」と「理系（科学や脳の仕組み）」を組み合わせたテーマは、これからの社会で最も求められる考え方であり、だからこそ全国の入試問題に採用されているのです。

入試の国語を解くときは、ただ正解の記号を探すだけでなく、「へえ、人間の心ってそんな風にかけているんだ！」と、新しい知識や視点を楽しむ余裕を持ってみてください。その知的好奇心こそが、どんな難しい文章でもスラスラと読めるようになる一番の特効薬になります。

■ 【特別収録】授業導入用の教務メモ（雑談ネタ）

講師が授業の冒頭で生徒に語りかける「導入トーク」の台本メモ。他県の出題事例などを交え、国語への心理的ハードルを下げるための実際の授業の空気感を収録している。

雑談ネタ1：「灘高生も解いている」という事実の提示

「千葉県の入試で出た齋藤亜矢さんの文章だけど、実は灘高や東京都の入試でも出題されているんだよね。灘高では、人間が『自分にとって必要な情報だけを選んで見ていて、目の前をゴリラが通っても気づかない』という認知科学の話が出た。千葉で出た『アートとサイエンス』の話もそうだけど、彼女の文章のパターン（主観的な感情を、客観的な科学で分析する型）さえ掴んでしまえば、ほかの学校の国語でも通用する読解力が身につくよ」

雑談ネタ2：「怖い」と「美しい」は同じ？（他県の出題より）

「みんな、お化け屋敷や絶叫マシーンって好き？ 動物は命の危険を感じたら逃げるのに、人間だけはわざわざ『怖いもの』でお金を払って楽しむよね。静岡県の入試で出た齋藤さんの文章では、その理由を解説しているんだ。人間の脳は、安全な場所で恐怖を感じると、脳内麻薬が出て快感を覚えるから癖になるらしい。今回出題されたような『認知科学』や『心理学』のテーマは、『人間ってなんでこんな不思議な行動をするんだろう？』という身近な謎解きなんだよ」